

19-1953

日本組織培養学会
平成4年9月20日

会員通信
第77号

発行責任者
※宇田川康博(慶應大医学部)
増井 徹(癌研)
山田堅一郎(国立予研)
下田 隆夫(社保相模野病)
※〒160 東京都新宿区信濃町35
慶應大学医学部産婦人科
電話 03-3353-1211 内2393
Fax 03-3226-1667

§ 第7回日本組織培養学会秋季公開シンポジウム案内

本年度秋季シンポジウムは、下記の通り肝・腎細胞培養に関する最近の話題を取りあげました。公開形式に致しましたので、本学会会員、非会員を問わず、多数の参加を歓迎します。

世話人 沖垣 達

日本組織培養学会秋季公開シンポジウム
肝・腎細胞培養をめぐる最近の話題

主催 日本組織培養学会
開催日 1992年11月21日(土) 13:00
会場 倉敷市 倉敷国際ホテル
プログラム

総合司会 沖垣 達(重井医研・細胞生物)

日本組織培養学会会長挨拶

蔵本博行(北里大医・産婦人科)

I. 肝細胞 13:10 - 15:10

司会 難波正義(岡山大医・分子細胞研)

1. 肝細胞DNA合成制御因子
宮崎正博(岡山大医・分子細胞研)
2. ヒト肝細胞増殖因子(hHGF)の産生制御
合田栄一 山本 格(岡山大薬・生物薬品製造)
3. 肝細胞スフェロイドをバイオリクターとするハイブリッド型人口肝開発の可能性
小出典男 辻 孝夫(岡山大医・第一内科)

4. 初代培養肝細胞の遺伝子導入

市原 明 野田千征子 (徳島大・酵素科学研・酵素病理)

II. 腎細胞 15:20 - 17:20

司会 大澤源吾 (川崎医大・腎臓内科)

1. 培養ラット糸球体上皮細胞 (SGE1) と腎炎の発症

川口 真 (兵庫医大・小児科)

2. ラット糸球体上皮細胞 (SGE1) の増殖分化と糖脂質変化

友野靖子 (重井医研・生化学)

3. 糸球体機能調節におけるメサンギウム細胞の役割

藤原芳廣 (大阪大医・第一内科)

後援 岡山大学地域共同研究センター 岡山県新技術振興財団
倉敷市 岡山バイオ懇話会

協賛 医療法人創和会 重井医学研究所

事務局 〒701-02 岡山市山田2117 重井医学研究所 (担当 梶原 西本)
Tel. 0862-82-3113 Fax. 0862-82-3115

[どなたでも参加できます]

§ 組織培養学会・細胞工学シンポジウム案内

テーマ 細胞の機能再現を重視した培養システムの構築
- 発生学、薬理学、臓器工学の接点を目指して -

場 所 東京医科歯科大学

日 時 1993年1月29日 (金)

プログラム

10:30 分

平井 洋平 バイオマテリアル研 45 形態形成の分子生物学

- カドヘリンからエピモルフィンへ

畑 隆一郎 東医科歯科・難研 45 細胞外マトリクスと組織構築

黒木登志夫 東大医科研・癌細胞 45 再構成培養皮膚を用いたがん研究

12:45 昼食

14:00

- 鈴木不二夫 阪大・歯・生化 45 軟骨と骨形成の分子生物学
- 堀江 秀典 横浜市大・医・生理 20 新しい神経軸索形成（伸長）因子
- 渡辺 芳明 バイオマテリアル研 20 中枢神経細胞のパターン形成を目指して
- 三井 洋司 微工研・動物細胞 20 培養系での血管形成とその応用
- 佐野恵海子 東レ基礎研 20 マイクロキャリアー培養下での
血管内皮細胞の機能亢進
- 岩田 博夫 国循環器センター 20 ラ氏島細胞のマイクロカプセル化
-細胞移植を目指して
- 赤池 敏宏 東工大・生命工学 20 肝臓の臓器工学
-培養系での人工臓器を目指して

17:00

17:30 ~ 懇親会

組織培養学会・細胞工学委員会・委員長：小林茂保

委員：吉里勝利、佐野恵海子、赤池敏宏、小山秀機、野田浩一、増井 徹

多くの先生方の参加をお願い申し上げます。

§ 日本組織培養学会平成4年度新旧合同幹事会議事録

日時 平成4年6月2日（火）午後2時～7時

場所 「遊学館」山形県生涯学習センター（山形市緑町1-2-36）

出席者 黒田行昭（前会長）、蔵本博行（新会長）、今西二郎、岩田邦夫、梅田 誠、
河原 大、下田隆夫、永森静志、西 義介、星 宏良、山田堅一郎（以上旧
幹事）加治和彦、沖垣 達、安野洋一、宇田川康博、蓮村 哲、増井 徹、
秦 宏樹（以上新幹事）、奥村秀夫（IACC会長）

I. 報告事項

1) 会長報告

2) 庶務報告

① 平成4 - 7年日本組織培養学会会長、平成4 - 5(6)年度幹事選挙報告

1. 会長：蔵本博行（北里大学医学部産婦人科）

2. 幹事：（40才以上）

平成4 - 6年度幹事

加治和彦（東京都老人研）

宇田川康博（慶應義塾大学医学部産婦人科学教室）

平成4、5年度幹事

安野洋一（京都府立医科大学皮膚科学教室）

沖垣 達（重井医学研究所）

3. 幹事（40才以下）

平成4 - 6年度幹事

浜口和之（大分市医師会立アルメイダ病院内分泌科）

秦 宏樹（北里大学医学部産婦人科）

平成4、5年度幹事

蓮村 哲（東京慈恵会医科大学第一内科）

増井 徹（癌研究所ウイルス腫瘍部）

② 会員移動（平成3年11月～平成4年5月）

1. 入会（正会員13名、賛助会員1社）

2. 退会（正会員7名、賛助会員2社）

平成4年5月22日現在正会員726名、賛助会員60社

③ 名誉会員の逝去

名誉会員の Dr. Honor B. Fellが1986年4月22日85歳で逝去されたと報告があった。

3) 渉外報告

IACC(International Association of Cell Culture) 関係

黒田前会長、星前渉外担当幹事の連名で、IACCの活動状況ならびにETCS

(European Tissue Culture Society), TCA(Tissue Culture Association

U. S. A.)とIACCとの関連につき直接手紙で問い合わせを行ったとの報告があった。

4) 奨励賞選考結果報告

第6回日本組織培養学会奨励賞の選考は、3名の候補より、北里大学医学部産婦人科 秦 宏樹先生が選考された。

5) 会員通信報告

平成3年度には、会員通信75・76号の2巻に発行された。

原則として今後は年3回の発行を予定し、総会の終了後（含秋期シンポジウムの予告）、シンポジウム後、総会前に発行する。

6) 各種委員会報告

① 編集委員会報告

平成3年度は、機関誌「組織培養研究」は従来通り2巻発行した。

高木委員長（代理星前幹事）より編集委員会の懸案事項として、組織培養研究年4回発刊体制が示された。それに伴う論文審査・レフェリーの充実と、年間560万円の予算の計上が指摘された。

② 細胞バンク委員会報告

1. 我が国における培養細胞の管理等における問題として、5省庁が関与し、Center system が確立されていない。組織培養学会を初めとする、35団体（27万人）賛同の下に5省庁に細胞バンク要望書を提出した。
2. 組織培養学会が中心となり「人体細胞使用に関するガイドライン」を制定する。
3. 細胞バンク間のdata base の交換、カタログの作成。

③ 細胞工学委員会報告

年間20万円の予算は、従来通り松村委員長預かりとし、年度毎に業務報告を幹事会宛に提出する。

④ 教育研究システム委員会

平成3年度は「Toxicology（黒田）」「Bioscience（梅田）」を刊行した。

7) 学術会議報告

- ① 日本学術会議会員選挙に山田正篤会員を推薦した（推薦人：黒田前会長）。
- ② 平成5年度より細胞生物学研究（一般研究、総合研究）の項目で研究費の申請が可能である。

II. 協議事項

1) 平成3年度決算について

平成3年度決算案が提出され承認された。

2) 会費値上げについて

編集委員会より懸案事項である、「組織培養研究」の年4巻発行実施を受けて、前会計担当幹事が検討した結果、会員の年会費を現状より50%値上げ（正会員：4,000円→6,000円、賛助会員：20,000円→30,000円）する提案がなされ、慎重に審議の上、これを承認した。

3) 教育研究システム委員会への予算計上について

教育研究システム委員会に対し、平成4年度より特別会計より年100,000円計上することが、沖垣新委員長より提案され、承認された。

4) IACC問題について

IACC新会長に就任された、奥村会員より説明があり承認された。

- ① 前会長であるDr. McGarrityの方針を再検討し、今後の施政方針をあらためて、Europe, U. S. A. と日本の培養学会に意思表示をする。
- ② 日本組織培養学会は、従来通り委員3名を担当者として存続させる。
- ③ 日本組織培養学会は、平成4年度も分担金として年200,000円を予算に計上す

- る。支払いの有無は、奥村IACC会長の活動方針の表明に応じて後日決定する。
- 5) 会長・幹事選挙規則の改正について
日本組織培養学会細則第3章に以下の追加が前庶務幹事より提案され承認された。
6. 選挙の結果、得票が同数の場合には年少者を会長あるいは幹事当選者とする。
- 6) 平成5年度第66回会の世話人について
平成5年度第66回大会世話人に三井洋司会員（微生物工業技術研究所）が推薦され承認された。
- 7) 平成4年度秋季シンポジウムの世話人について
平成4年度秋季シンポジウム世話人に沖垣 達会員（重井医学研究所）が推薦され承認された。
- 8) 平成4年度予算について
西前会計担当幹事より、前述の2)、3)、4)の項目を繰り込んだ平成4年度予算案が提出され、承認された。

Ⅲ. 新役員による幹事会

新役員の役割分担が以下の如く決定された。

庶務幹事：加治、秦

会計幹事：安野、（西）

奨励賞選考幹事：沖垣、蓮村

会員通信幹事：宇田川、増井、（山田、下田）

各委員会担当幹事

①編集委員会：浜口

②細胞バンク委員会：浜口

③細胞工学委員会：増井

④教育研究システム委員会：沖垣

（ ）内は、会長推薦により継続して平成4年度も担当する前幹事。

§ 日本組織培養学会平成4年度総会議事録

日 時 平成4年6月4日（木）午後1時～2時

場 所 「遊学館」山形生涯学習センター（山形県緑町1-2-36）

- I. 議長選出：及川胤昭（機能性ペプチド研究所）第65回大会世話人を選出。
- II. 前会長挨拶：（黒田行昭前会長）
- III. 新会長挨拶：（蔵本博行新会長）

IV. 報告

1. 会長報告（黒田行昭前会長）
2. 庶務報告（前庶務幹事、新庶務幹事）
 - 1) 平成4～7年度会長、平成4～5(6)年度幹事選挙結果報告
 - 2) 会員移動（平成3年11月～平成4年5月）報告
 - 3) 新幹事役割分担の報告
 - 4) 細則の改定：日本組織培養学会細則第3章の追加
3. 渉外報告（前渉外幹事）

IACCの活動状況・当学会との関連についての報告。
4. 奨励賞選考結果報告（前奨励賞幹事）

第6回日本組織培養学会奨励賞選考結果：北里大学医学部 秦 宏樹先生
5. 会員通信報告（前会員通信幹事）

平成3年度：会員通信75・76号発行報告
6. 各委員会報告
 - 1) 編集委員会報告（前幹事）

平成3年度：機関誌「組織培養研究」2巻発行報告。
「組織培養研究」の年4回発行体制を懸案し、幹事会に提出した。
 - 2) 細胞バンク委員会報告（前幹事）

細胞バンク center system 設置要望書を5省庁に提出した。
「人体細胞使用に関するガイドライン」を制定する。
 - 3) 細胞工学委員会報告（前幹事）
 - 4) 教育研究システム委員会報告（沖垣新委員長）

平成3年度発刊：「Toxicology」「Bioscience」
平成4年度より予算計上し、活動報告をする。

IV. 平成3年度決算（前会計担当幹事）

平成3年度予算ならびに平成3年度収入・支出が報告され、承認された。

V. 平成4年度予算・会費値上げ案（西会計担当幹事、高木編集委員会委員長）

1. 編集委員会報告を受け、高木委員長より「細胞培養研究」年4回発刊体制に関する説明がなされ、その予算計上のための会員年会費値上げ案（正会員：4,000円→6,000円、賛助会員：20,000円→30,000円）が提出され、審議の上議決された。
 2. 会費値上げによる増収と、「組織培養研究」4回発行に伴う予算を取り込んだ平成4年度予算案が提出され、審議の上承認された。
- #### VI. 平成3年度日本組織培養学会奨励賞授与（黒田前会長）

§ 日本組織培養学会 平成3年度決算書

(平成3年4月1日～平成4年3月31日)

一般会計

収入の部

勘定科目	平成3年度予算額	平成3年度決算額	摘要
正会員会費	2,480,000 円	2,604,600 円	
賛助会員会費	1,740,000	1,590,000	
入会金	50,000	15,000	
広告収入	1,420,000	1,079,588	
雑収入	90,000	118,856	Back No収入
小計	5,780,000	5,408,044	
前年度繰越金	(378,107)	1,286,444	
合計	6,158,107	6,694,488	

支出の部

勘定科目	平成3年度予算額	平成3年度決算額	摘要
研究誌No.2発行費	1,890,000 円	1,535,232 円	10巻2号
会員通信発行費	400,000	374,242	No. 75, 76号
大会補助金	400,000	400,000	
秋季シボカム補助金	300,000	300,000	
I A C C加盟費	200,000	0	
同 事務費	100,000	0	
業務委託費	950,000	1,192,208	
研究誌No.2発送費	190,000	158,760	
事務通信費	500,000	655,536	各種発送物 送料等
会員名簿作成費	450,000	468,248	
幹事会議費	550,000	179,490	
編集会議費	200,000	197,712	
雑費	0	126,809	印刷代、コピー代
予備費	28,107	0	
小計	6,158,107	5,588,237	
収支差額	0	1,106,251	
合計	6,158,107	6,694,488	

特別会計

収入の部

勘定科目	平成3年度予算額	平成3年度決算額	摘要
寄付金収入	600,000 円	703,980 円	合同酒精より
出版収益	500,000	390,240	朝倉書店より
利子収入	200,000	455,660	
雑収入	0	124,193	JICST、原稿料等
小計	1,300,000	1,674,073	
前年度繰越金	8,631,115	8,267,728	
合計	9,931,115	9,941,801	

支出の部

勘定科目	平成3年度予算額	平成3年度決算額	摘要
外国人招待費	100,000 円	100,000 円	
学会奨励賞	300,000	300,000	
細胞バンク委員会	300,000	300,000	
細胞工学委員会	200,000	200,000	
細胞バンク委員会			
報告印刷費	0	0	
雑費	0	0	
小計	900,000	900,000	
収支差額	9,031,115	9,041,801	
合計	9,931,115	9,941,801	

§ 日本組織培養学会 平成4年度予算書

(平成4年4月1日～平成5年3月31日)

<一般会計>

収入の部

勘定科目	平成3年度予算額	平成4年度予算額	摘要
正会員会費	2,480,000 円	3,720,000 円	50%up
賛助会員会費	1,740,000	2,610,000	50%up
入会金	50,000	50,000	
広告収入	1,420,000	3,200,000	4号分
雑収入	90,000	90,000	Back No収入
小計	5,780,000	9,670,000	
前年度繰越金	(378,107)	1,106,251	
合計	6,158,107	10,776,251	

支出の部

勘定科目	平成3年度予算額	平成4年度予算額	摘要
研究誌発行費	1,890,000 円	5,600,000 円	4号分
会員通信発行費	400,000	400,000	
大会補助金	400,000	400,000	
秋季シボカム補助金	300,000	300,000	
IACC加盟費	200,000	200,000	
同事務費	100,000	100,000	
業務委託費	950,000	1,300,000	
研究誌発送費	190,000	560,000	4号分
事務通信費	500,000	600,000	
会員名簿作成費	450,000	250,000	来年度繰越
幹事会議費	550,000	300,000	
編集会議費	200,000	200,000	
雑費	0	60,000	
予備費	28,107	30,000	
小計	6,158,107	10,300,000	
収支差額	0	476,251	
合計	6,158,107	10,776,251	

特別会計

収入の部

勘定科目	平成3年度予算額	平成4年度予算額	摘要
寄付金収入	600,000 円	700,000 円	合同酒精より
出版収益	500,000	300,000	朝倉書店より
利子収入	200,000	400,000	
雑収入	0	0	
小計	1,300,000	1,400,000	
前年度繰越金	8,631,115	9,041,801	
合計	9,931,115	10,441,801	

支出の部

勘定科目	平成3年度予算額	平成4年度予算額	摘要
外国人招待費	100,000 円	100,000 円	
学会奨励賞	300,000	300,000	
細胞バンク委員会	300,000	300,000	
細胞工学委員会	200,000	200,000	
教育研究システム 委員会	0	100,000	
雑費	0	0	
小計	900,000	1,000,000	
収支差額	9,031,115	9,441,801	
合計	9,931,115	10,441,801	

<平成3年度収支決算及び平成4年度予算について>

平成3年度の決算書と平成4年度の予算書を掲載致します。第65回大会総会で承認を受けたものです。

1) 平成3年度決算書について：

- ① IACC加盟費及び同事務費が、平成3年度は未執行です。本件の支払いに関しては引き続き審議事項になります。
- ② 取り扱い事務量の絶対数の増加に伴い業務委託費、事務通信費が増加しております。
- ③ 幹事会議費が予算を下回りました。
- ④ 決算額については、110万円の強の黒字が計上されました。
- ⑤ 本決算は佐藤温重（東京医科歯科大）、加治和彦（都老人研）、両会計監査の監査を受けております。

2) 平成4年度予算書について：

- ① 機関誌（Tissue Culture Research Communications）の年4回発行（現行は年2

- 回)に伴い、研究誌発行費及び研究誌発送費が従来の4倍に増加(現行は秋季号のみ発行費、発送費負担)します。1号あたりの平均発行費を140万円(実際の発行費は、3号分については、1号あたり160万円、大会号についてはオフセットとして80万円として計算)、発送費を140万円として支出を計上すると、通年に比べ420万円強の支出増が見込まれます。これは正会員会費、賛助会員会費、広告費で補完します。広告費を1号あたり平均80万円見込むと、年間240万円の収入増、不足分180万円を会員会費に振り当てると、ほぼ50%の値上げ(正会員会費4,000円→6,000円、賛助会員会費20,000円→30,000円)で200万円強が補える計算になります。
- ② その他の経費増は幹事会議費を削減、前年度繰越金を活用することによって充当します。
 - ③ 特別会計は原則として、発行費には充当しませんが、一時的に不足を補う形で支払うことは可能です。
 - ④ 値上げについての経緯は第64回大会総会議事録(会員通信74号)、組織培養研究編集委員会からのお知らせ及び、“学会費値上げに関する趣意書(会員通信75号)”を参照して下さい。

会計幹事 安野 洋一
同 西 義介

§ 第65回大会を終えて

第65回大会は6月3、4、5日の三日間山形市にある山形県生涯学習センター遊学館とNTTのプラザチアーズを会場として開催されました。参加会員数は270名で、当初、大会準備委員会で予想していた人数をかなり上回るものでありました。準備のほうは当機能性ペプチド研究所のスタッフ全員（8名）で手分けして行い、不足の部分はアルバイトを少々導入致しました。しかしながら、経費節減を考えなるべく少ない人員で運営されたこともあり参加者の皆様には少々御不自由な点もあったかと思っております。それに、NTTのプラザチアーズで行われた機器展示は直接商売と関連するので県立の遊学館では開催できないという事情がございましたので、二会場に分けざるを得なかったという点も、少々参加者の方々には御不便をおかけしたのではないかと思っております。

大会企画の中には特別講演2題、シンポジウムが5つ、ワークショップが1つ、ポスター講演20題、一般講演12題が設定され、いずれも、この分野の現在の学術的傾向または流れを十分に反映する演題であったと思われまます。特に、いずれのセッションにおいても熱心な討論が長く続き、予定講演時間を大幅にオーバーすることがしばしばであったのが印象的でした。また、大会第一日目の夜に開催された懇親会には足の踏み場もないくらいの会員が参加され、非常に和やかに、学会会場外での飲みニュケーションがなされていたようでした。

ともあれ、学会終了後、皆様からちょうだい致しましたお便りにはまあまあの学会であったという下りがございましたのでホット胸をなでおろした次第であります。ただ気掛かりであったのは山菜の季節なので山菜は食べられたのですが、山形の名産サクランボの季節には少々早くサクランボを皆さんに食べていただけなかったのが残念に思っております。もし、またこのような機会があるようでしたら、その時には是非サクランボが食べられますように会期を設定させていただくつもりであります。

機能性ペプチド研究所
所長 及川 胤昭

§ 日本組織培養学会第65回大会を終えて

第65回大会実行委員長 星 宏 良
機能性ペプチド研究所

日本組織培養学会第65回大会は、6月3日～5日の3日間、山形市の山形県生涯学習センターを主会場として開催されました。当センターは最近建造された建物で、多くの参加者の方々かた快適かつ機能的な会議場として喜んでいただき、大会実行委員会とし

ては一安心いたしました。しかし、ポスター講演と商品展示のプラザチアーズ会場は、展示スペースが手狭であったことや主会場の生涯学習センターから少し離れているなどのため、参加者に御不便をおかけし誠に申し訳なく思っております。数日前までの異常低温注意報がでるほどの寒い天気が大会開催とともに一変して、真夏を思わせるような暑い天気となり、これも大会参加者の期待と熱意の表われかと思える程でした。これを裏づけるように東北の田舎町での大会開催というのに、250名を超える多くの参加者を迎えることができました。

第65回大会のプログラム構成は、特別講演、シンポジウム、ワークショップ、一般講演、ポスター講演で企画致しました。特別講演には、本学会の前会長である黒田行昭教授（麻布大学）より、組織培養研究が日本の学術研究に対してどのような貢献をしてきたのか、歴史的総説をしていただきました。先生の総括的な講演で、日本組織培養学会会員である先駆的研究者が、日本のみならず世界の生命科学研究に対して多大の貢献を残してきた足跡を、あらためて認識させていただきました。もうひとつの特別講演は、最近、哺乳類の発生工学研究分野で頭角を表わしてきた若手研究者、Robert M. Petters教授（ノースカロライナ州立大学）の発表がありました。先生は、主にブタの体外成熟、体外受精、体外発生のシステムを用いて移植可能な受精卵（胚盤胞）を効率的に作出するためには、従来の体細胞用基礎培地を改良した体外発生用培地の開発、胚と生殖器官由来体細胞（特に卵管上皮細胞）の共培養、などが有効であることを報告いたしました。

組織培養技法は、かつては従来ごく限られた研究者の秘技として考えられ、あまり他分野の研究者に顧みられることはありませんでした。しかし、1970年代以後ハイブリドーマ細胞など抗体産生細胞の樹立、遺伝子組み換え法における生理活性物質生産の宿主細胞としての利用など、医学生物学研究にとって必要不可欠の技術となり飛躍的に発展しつつあります。本大会では、組織培養技術が将来において基礎研究と応用開発に対して特にインパクトが考えられる5つのテーマについてシンポジウムを企画いたしました。

「バイオアクティブマテリアル研究の進展」では、赤池敏宏先生（東工大）と藤吉宣男先生（ベッセルリサーチ・ラボ）の司会で、造血系細胞の増殖と分化、線維芽細胞・肝細胞の細胞外マトリックスタンパク質と機能発現について発表と討論が行われました。

「機能細胞の分子・細胞生物学」では、三井洋司先生（徴工研）の司会により、赤血球、軟骨、結膜、神経、心筋細胞を生体内と同様に機能させるための新しい培養法の確立と、機能発現に關与する生理活性物質の分子・細胞レベルで解析された結果の発表がありました。「Toxicologyの新しい流れを支える技術と応用」では、渡辺正己先生（長崎大）の司会で近年話題になっている、新しく開発された医薬品、化粧品などの副作用スクリーニングに用いられる実験動物の代替えとして、培養細胞による検出システムが有効かどうかについて問題提起していただくとともに、将来への実用化の可能性を討論していただきました。「受精・胚発生と組織培養」では、角田幸雄先生（近畿大）の司会で、最近体外培養系で、哺乳類動物による卵子の成熟、受精、胚の発生が可能になってきたことが報告されました。将来家畜の大量増産につながる受精卵移植への応用、発生工学技術を導入した疾患モデル動物の作出にとって必須の技術になりうるとの報告がありました。「細胞成長因子とオンコジーン」では、加治和彦先生（東京都老人研）と山本 雅先生（東大医科研）の司会で、細胞成長因子（PGF, TGF- β , HGF）のレセプタータンパ

ク質の構造と生理的作用の関係、オンコジーン (C-met, Src) の細胞内情報伝達系の分子メカニズムについて興味ある最新の知見が披露されました。ワークショップ「細胞株の情報流通」では、大野忠夫先生(理研細胞銀行)の司会で、現在公的活動をしている国内の細胞銀行の活動状況と問題点が報告され、日本組織培養学会は、細胞バンク活動を全面的に協力する中心的学会であり、今後学会としてどのように細胞バンク活動を具体的に支援してゆくのかについても報告がありました。一般講演、ポスター講演については、発表時間を充分にとり、発表者もお質問者もお互いの相互理解が充分えられるよう企画いたしました。しかし、ポスター講演のスペースが充分でなかったこと、一般講演とシンポジウムが同じ時間であったことで大変興味ある一般講演の参加者が少なく見受けられたのは、今後の課題として残りました。

本大会のプログラム作成については、従来の一部の研究者による組織培養技術から、今や組織培養は、すべての生命科学研究にとって必要不可欠の技術であるという認識に立脚して、それぞれのテーマを企画致しました。本大会での研究報告が、基礎研究の枠内にとどまらず、近い将来臨床応用や実用化に対して具体的な展望を明示できることを期待いたします。

最後に3日間、興味ある話題を提供していただいた講演者の諸先生方、適切なリードで大会の雰囲気をも十分に演出していただいた司会者の諸先生方、フロアーより活発な質問、意見を出していただいた参加者の皆様、大会の裏方として円滑な会運営に貢献いただいた関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

§ 会長の任を終えて

麻布大学生物科学総合研究所
黒 田 行 昭

前々会長佐藤二郎博士の後を受けて、昭和63年4月より務めて参りました会長の任を、本年3月終えさせていただきました。この間、学会としての毎年春の大会は昭和63年の第61回大会は大分市のトキワ会館(世話人:高木良三郎会員)で、翌平成元年の第62回大会は横浜市の神奈川県勤労会館(世話人:蔵本博行会員)で、平成2年の第63回大会は京都市の国立京都国際会館(世話人:今西二郎会員)で、平成3年の昭和64回大会は相模原市の麻布大学(世話人:黒田行昭会員)で、それぞれ世話人の先生方のお骨折りで盛會裡に開催することができました。また、恒例になっている秋のシンポジウムは昭和63年の第3回シンポジウムは日本動物実験代替法研究会との共催で東京医科歯科大学(世話人:二階堂 修会員他3名)で、平成元年の第4回シンポジウムは日本応用細胞生物学研究会との共催で仙台市の東北大学長陵会館(世話人:山根 續会員)で、平成2年の第5回シンポジウムは大宮市のソニックシティ(世話人:久米川正好会員)で、平成3年の第6回シンポジウムは東京都内ルークホール(世話人:加治和彦、近藤 昊

会員)で、それぞれ興味深いテーマのもとに盛大に開催されました。この中で第4回と第5回は学会の中に設けられた細胞工学委員会で企画したシンポジウムを併催いたしました。

このような国内での学会、シンポジウムのほか、とくに平成3年(1991年)6月には日米の組織培養学会が合同して大会を開催することになり、これにはヨーロッパの組織培養学会にも参加を呼び掛け“1991 World Congress on Cell and Tissue Culture”をカリフォルニア州アナハイムのマリOTTホテルを借り切って開催しました。これには3つのシンポジウムのほか23の Sessions-in-Depth(SID)、10のワークショップのほか一般講演も含めて世界から約2,000人の参加者があり、日本からは、日本植物組織培養学会の全面的なご協力を得て多数の植物の組織培養研究者の参加があり、各シンポジウム、SID、ワークショップなどの座長、講演者などのほか一般講演の申込者を含めて約130人の参加がされ、最近の組織培養研究の新しい発展状況を身近に感じることができました。この国際会議は本年6月に今度はアメリカとヨーロッパの組織培養学会が中心になって第2回目が開催されています。

私の会長任期中に学会活動としてとくにお礼を申し上げたいのは編集委員会(委員長:高木良三郎会員)、細胞バンク委員会(委員長:星 宏良会員)、細胞工学委員会(委員長:小林茂保会員)、教育研究システム委員会(委員長:梅田 誠会員)の各委員会が、それぞれ時代の流れに対応して非常に活発で精力的な活動をしていただき、学会活動を盛り上げていただいたことです。編集委員会では学会機関誌を英文の原著論文も掲載できるTCRC(Tissue Culture Research Communications)を年4回刊行することを軌道に乗せていただきました。また、細胞バンク委員会では日本国内における細胞株リストと品質管理に関する標準プロトコール(マイコプラズマ、細菌、真菌の汚染検査)の作成や各省庁を統合した国立の細胞バンク設立のための要請書を、生命科学関連の35学会長(会員数265,815名)のご賛同と署名とともに政府関係各省庁に提出したことなどがあげられます。

細胞工学委員会では民間のバイオテクノロジー関連各企業との連携をはかり、2回にわたる秋の学会シンポジウムを併催していただきました。また、教育研究システム委員会では学生、大学院生など若い世代への教育の充実をめざして「組織培養の技術」「細胞成長因子、Part 1, Part 2」「細胞とバイオサイエンスI、II」「細胞トキシコロジー試験法」を刊行し、その印税が学会の会計を少しではありますがうるおしております。

組織培養の技法は初期の名人芸的な限られた人たちだけの技術から脱皮して、培養液、血清、シャーレ、ピペットなどほとんどすべてが標準化された商品が使用できるようになり、より普遍的に、より一般的に多くのライフサイエンスのあらゆる基礎、応用の領域に利用されるようになっていきます。初期には滅菌操作や培養法そのものが討議の対象になっていたものが、今日ではこのような基本的な技術をふまえた上で、培養技術をどのような新しい分野に応用できるか、他の分野で開発された技術をどのように組織培養の研究の中に取り入れるか、といった面に研究者の興味が移ってきています。学会を支える組織培養の技術が細胞・分子レベルの多くの研究に必須の技法となっている今日、将来の学会のあり方としてより深く会員の皆様と考えていただきたいと存じます。会長を辞するに当たり私の提言としてつぎのことを挙げておきます。

- 1) 今日、組織培養を使ったすぐれた研究をされている研究者で会員でない方には、できるだけ会に入会していただき、発表や討議に参加していただくこと。春の大会に開催されるシンポジウムには最前線で活発な研究をしておられる若手、あるいは中堅の多くの研究者が講演者として招待されています。その中には会員でない方が多いので、そのような方にはその方の研究室の方を含めて入会していただくように勧誘する。
- 2) 組織培養の技術は依然として、器具の洗浄や滅菌から始めて無菌操作、初代培養、継代培養、増殖率の測定などの基本操作の上に新しい高度な研究が行われています。これから新しい組織培養の研究を始めたい方々のために学会が主催したワークショップなどの企画してはいかがでしょうか。
新しい会長になられた蔵本博行博士のもとに学会幹事、委員会ともども本学会の今後の発展に大きく進まれますことを期待しております。

§ 新任の御挨拶

北里大学医学部産婦人科・組織培養センター
会長 蔵 本 博 行

此の度、伝統ある本学会の会長に選任され、先の第65回大会時より黒田行昭前会長の後任として大任を拝命することになりましたので、一言御挨拶申し上げます。

日本組織培養学会は、申すまでもなく勝田甫先生の下で発足し、山田正篤先生、佐藤二郎先生、黒田行昭先生の歴代会長を中心として優れた諸先輩が営々と築いて来られた、36年以上の歴史を誇る学会であります。このような伝統ある本学会の舵取り役を仰せつかりましたことは誠に光栄ではありますが、未だ浅学非才の身にとりましては身の引き締まる思いばかりでなく、青天の霹靂とさえも言える戸惑いを覚えております。どうぞ会員の皆様方には、本学会の進む航路に誤りがありませぬよう、御忠告・御提言下さいますようお願い申し上げます。

私達が専門としております細胞・組織培養の領域は、この数年間に大きな進歩を遂げておりますことは御承知の通りであります。これまで一部の学者の特技・秘技でありました培養技術は、どのような初心者であっても気軽に取り組めるものとなりました。象牙の塔の奥深くで執り行われていたことが、工業、農業、医療等にも応用され社会の利益を生み、人類の福祉に直接還元されるようになって来ております。私自身の分野でも、細胞培養が細胞工学に応用され、これによって作り出された新薬が患者の特効薬として多大な効果を発揮しているのを目の当たりにしております。つまり、培養技法は、その関連技術の開発と相まって、極めて多くの領域で普及し社会的にも重要な役割を担ってきていると言えるのではないのでしょうか。

培養研究を取り巻く進歩は、これとは裏腹に別の(問題?)点も出て来ております。すなわち今日、細胞・組織培養のみを純粋に行っている研究者はむしろ少なく、急速に

発展を遂げた関連技法と併せて研究を行っている人がほとんどでありましょう。

また、私達の学会の会員数は 800名弱であります。今や組織培養に従事している人々は恐らくこの数十倍に上ると考えられます。

このような状況下で、私達の日本組織培養学会の進むべき道はどのような方向でありましょうか。私達会員の有益な情報交換と研究の向上は勿論ではありますが、それぞれ培養に関連するが別の専門領域を持つもの同志がどのように集まり、共通の利益を生んで行くべきでしょうか。数十倍と想定される会員外の培養研究者にも指針を与える、正統の培養学会としてどのように対処すべきでしょうか。また、倫理的なことも含めて一般社会との接触も必要となって来るでありましょう。

本学会の抱える問題は、このように多彩であります。もとより浅学非才の若造であります。鋭意前向きに微力を尽くして参りたいと存じております。幸い、幹事諸氏は有能で多士済々であります。会員の方々の御助言・御協力なしでは職責を全う出来るものではないことも明らかであります。どうぞくれぐれも宜しく御指導賜りますようお願いし、御挨拶に代えさせていただきます。

§ 日本組織培養学会第66回大会のお知らせ

日本組織培養学会第66回大会を、来年6月に筑波研究学園都市において開催します。つくば市には、大学や国立研究所と、民間研究所が約 200余も集中して、世界に希な一大研究拠点として、独特の雰囲気を作っています。

最近、交通の便も良く、文化施設も多くなって、研究活動だけでなく人間味豊かな生活の場ともなってきました。この機会にぜひ生き生きとしたつくばの姿をご覧いただき、新しい研究と遊び心を発見して下さい。

一般演題とポスターとシンポジウムを募集します。1993年2月末を要旨締切と予定します。ご準備下さい。

詳細は次回(12月末)会員通信にて、申込書等を含めて、ご案内します。シンポジウム内容については組織培養学会の伝統と最新研究の両立を期待しています。会員の皆様からもテーマの提案をお待ちします。

(三井 洋司)

開催期日 : 1993年6月17日(木)、6月18日(金)

開催地 : 茨城県つくば市

大会会場 : 工業技術院、つくば研究センター (東京駅南口より1時間余)

懇親会 : 6月17日(木)つくば研究支援センター テクノホール

オプションツアー : 6月19日(土)希望が多ければつくば研究団地見学

(バス)と筑波山登山のツアーを組むかも知れません。

大会会長 : 三井 洋司
事務局長 : 岡 修一
連絡先 : 〒305 茨城県つくば市東1-1-3

工業技術院

微生物工業技術研究所(1993年1月から生命工学総合研究所に組織
変更の予定)

Tel : 0298-54-6070

Fax : 0298-54-6095

§ 平成4年度 第1回組織培養研究編集委員会報告

日時 6月4日(木) 12:00 AM~1:00PM

場所 山形県生涯学習センター 第一応接室

出席者 高木良三郎、梅田 誠、渡辺正己、加治和彦、星 宏良

1. 10巻2号(1991年11月発刊)の最終的収支決算報告が、星委員よりありました。
2. 11巻1号(1992年3月発刊)の収支状況と、大会抄録誌11巻2号(1992年6月発刊)の報告が星委員よりありました。
3. 組織培養研究を年2回から年4回に増刊する件について
 - i) 学会誌である組織培養研究は、日本組織培養学会の中心的活動のひとつであることの認識から、より充実した学会誌としての体裁のために、年2回から年4回の増刊、公正な審査体制の確立の必要性について再度確認されました。増刊に伴う費用捻出の方法として、広告収入を増加させること、会費の値上げをお願いすることの2点が話し合われました。特に、会費値上げには会員に対するご理解をいただくために、高木良三郎委員長より総会場で、学会誌を充実させる意義とそれに伴う増刊の費用増大のため、これまでも会員通信等で会費値上げを会員にお願いしてきた経過説明、そして再度総会での会員皆様のご協力をお願いすることを諒承しました。
 - ii) 年4回増刊に伴い、会費値上げ分だけでは、費用は大幅に不足することから、広告料の増大のために、編集委員各位が新規広告依頼会社獲得のために、より一層努力することを確認いたしました。
 - iii) 今後の発行として、11巻3号(1992年9月)、11巻4号(1992年12月)を予定することが話し合われました。
4. 投稿原稿募集の件
年4回増刊により、より多くの質の高い論文の投稿を会員にお願いする件が、話し合われました。具体的には、6月3~5日の第65回大会の特別講演、シンポジウム、ワークショップで発表された諸先生方に論文投稿の案内を出していることが星委員

より報告がありました。秋期シンポジウムの講演者にも同様に投稿案内を出すことが話し合われました。

(文責 星 宏良)

§ 組織培養研究への投稿論文募集のお知らせ

日本組織培養学会の機関誌である組織培養研究(以下TCRCと略)は、本年11巻を数えるに至りました。

TCRC編集委員会では、内容の充実とスタイルの一新をはかるべく検討を重ねてまいりました。具体的方策として、①年2回の発行を年4回に増刊すること、②学会員の研究活動を海外の研究者に、また海外の研究情報をより広く国内の研究者に知っていただくためにも、投稿論文を英文主体に移行したいこと、③投稿論文の公正な審査体制を確率するため、国内外の25名の組織培養研究者に審査委員承諾していただいたこと、④学会誌のスタイルの一新と統一などを検討、実行してまいりました。

先の6月山形市で開催された第65回大会総会において、年4回発行が本決まりとなり、いよいよ新生TCRCのスタートとなりました。特に発行回数が増えたことで、論文の新規性が損なわれることなく読者に伝えられるようになりました。

TCRCを優れた論文の発表の場として大いに活用していただきたいと思います。学会員皆様からの積極的な論文投稿をお待ちしております。

尚、論文投稿規定は、TCRC巻末に掲載してありますので参照して下さい。

(文責 星 宏良)

論文投稿問い合わせ先 : 〒990 山形市南三番町11-26
機能性ペプチド研究所内
組織培養研究編集事務局 星 宏良

§ 平成4年度 第1回細胞バンク委員会報告

日 時 6月3日(水) 12:00 AM~ 1:00 PM

場 所 山形県生涯学習センター 第4研究室

出席者 梅田 誠、大野忠夫、工藤俊雄、佐藤敬喜、竹内昌男、田中憲穂、
宮崎正博(難波正義代理)、松村外志張、水沢 博、星 宏良

今回の委員会は、平成2年7月に発足した第二次細胞バンク委員会の二年間の活動のまとめと、これまでの成果を基に今後の活動継続について話し合いがもたれました。

1. 平成3年度細胞バンク委員会の収支決算報告が星委員長よりありました。
2. 「わが国における培養細胞の保存供給体制・整備に関する要望書」は、すでに厚生省、科学技術庁、文部省、農林水産省、通産省の担当者と面会し、その時の口頭発表による要約を再度関係省庁担当者に見せ、同意を得た後公表することを諒解していただいたこと、またこれら関係省庁担当者からの回答についてすでに黒田行昭前学会長の承認の後、賛同をいただいた35学会協団体に対して報告を行ったこと、などが大野忠夫委員より報告されました。
3. 人体組織、細胞を用いる研究・業務に関する提案ならびに倫理基準については松村外志張委員よりすでに提出されている検討資料について詳しい説明があり、昨年11月に川村杉生委員と一緒に米国のCoriell Institute for Medical ResearchとAmerican Tissue Culture Collection を訪問した時の報告書について説明がありました。
4. 細胞株相互利用における細胞バンク間のデータベースネットワーク体制の確立の件では、平成3年度文部省の科研費の援助を受けて、国立衛試細胞バンク、理研細胞バンク、東北大抗研癌細胞保存施設、発酵研の間のデータベースネットワーク体制が出来たこと、今後ユーザーにより利用しやすいようにカタログ作成の具体的な提案が水沢 博委員よりありました。
5. 細胞株同定に関するDNAフィンガープリンティング法やマイコプラズマ汚染の検定について、国際的に標準化した方法に統一してゆく動きのあることが水沢 博委員より報告がありました。
6. 第二次細胞バンク委員会の終了後、まだ多くの重要案件が残っている事、細胞バンク活動は、学会としては日本組織培養学会が中心的活動をになっていることを考慮して、今後も新しく組織された細胞バンク委員会として継続してもらいたいとの幹事会からの要請が星委員長より報告されました。
7. 新しく組織される細胞バンク委員会を考慮して、一部細胞バンク委員会規約の改正が検討されました。

(文責 星 宏良)

§ 教育研究システム委員会報告

山形での新幹事会において提案されました教育研究システム委員会の今後の運営について、7月6日に旧委員を含めた準備会を開催し、次のように方針を定めました。

☆ 名称 従来通り「教育研究システム委員会」とする

☆ 本年度以降の望ましい事業

- 1) 現在進行中の「細胞成長因子Ⅲ」（朝倉書店）の平成4年度内刊行
- 2) 「組織培養の技術Ⅲ」刊行の検討
- 3) 「大学教科課程の準拠した基本的な培養技術の指導書」刊行の検討
- 4) 培養技術実技講習会の開催の検討（理研等との対応で）
- 5) 秋季シンポジウムの長期的立案

本年度は11月21日（土）倉敷国際ホテル「肝・腎細胞培養 最近の話題」
（別項参照）

☆ 委員 沖 垣 達（委員長）重井医研
丹 羽 章 獨協医科大
梅 田 誠 横浜市大
大 野 忠 夫 理研
西 義 介 日本たばこ

☆ 「細胞培養技術Ⅲ」編集委員

丹 羽 章（委員長）獨協医科大
梅 田 誠 横浜市大
西 義 介 日本たばこ
増 井 徹 癌研究所
沖 垣 達 重井医研

☆ 委員会の開催

年末迄に1回、年度内に計2回目を開き、委員には旅費を支給する。編集委員会はこれと同時または独自に開催する。委員会としては、会長および庶務幹事の出席を歓迎する。

以上の通りで進行致したく存じます。関係各位の御了解を頂ければ幸いです。

教育研究システム委員会
委員長 沖 垣 達

S 第7回日本組織培養学会奨励賞募集要項（平成5年度）

本奨励賞は、昭和60年（1985年）9月、本学会共催のもとに仙台で開催されました第3回国際細胞培養会議（3rd International Cell Culture Congress）の世話をされました山根 續会員から、運営余剰金 500万円を若手研究者の研究を奨励するために寄付いただいたものにもとづいて設けられました。本学会ではこれまですでに次のような6回、8名の方々に奨励賞を授与しております。

第1回 昭和62年度

菅 幹雄（東北大学・抗酸菌研）

培養器壁に吸着した線維芽細胞由来因子によるヒト臍帯静脈内皮細胞の増殖刺激
（第58回大会発表）

第2回 昭和63年度

宮崎 正博（岡山大学・医学部・癌研）

初代無血清培養成熟ラット肝細胞の長期維持の試み
（第60回大会発表）

武富 真子（日本たばこ㈱・中研）

ツパイア細胞の樹立とその変異原性試験への応用
（第60回大会発表）

第3回 平成元年度

越智 崇文（帝京大学・薬学部）

カドミウム毒性に対する細胞防御因子としてのグルタチオンおよびメタルチオネ
インに関する研究
（第60回大会発表）

山田 雅保（重井医学研究所）

腎糸球体上皮細胞株（SGE1）の樹立、培養条件および特性に関する研究
（第61回大会発表）

第4回 平成2年度

鈴木 啓司（横浜市大・医学部）

ゴールデンハムスター胎児由来細胞におけるX線誘発細胞がん化の多段階性
（第61回大会発表）

第5回 平成3年度

柴沼 質子 (東大・医科研・癌細胞)

活性酸素による細胞増殖制御

(第62回大会発表)

第6回 平成4年度

秦 宏樹 (北里大学・医学部)

Immunocytochemical determination of estrogen and progesterone receptors
in human endometrial adenocarcinoma cells(Ishikawa cells)

(第63回大会発表)

過去2年度内(平成3年度、平成4年度)に筆頭者として日本組織培養学会大会(第64回、第65回)で発表された方のうち、学術雑誌に発表された方(第一著者で受理中も可)で40歳未満(平成5年4月1日現在)の日本組織培養学会に所属する若手研究者に授与されます。

条件にあった方は自薦、他薦いずれでも結構ですのでふるって別紙推薦書を添付のうえ応募されますよう御案内申しあげます。

〆切期限は平成4年12月20日といたします。

例年、ご推薦が少なく、選考委員会では多数の方々の推薦を期待しておりますので該当される若手研究者を奮って御推薦(自薦可)下さい。

なお推薦にあたっては以下の書類、論文の別刷を下記宛先まで御送付ください。

- | | |
|---------------------------------|-----|
| 1) 推薦/自薦書(本要項次頁) | 1通 |
| 2) 内容要旨(400字詰B5版原稿用紙2枚以内) | 1通 |
| 3) 推薦状(自他薦可) | 1通 |
| 4) 履歴書(B5版) | 1通 |
| 5) 発表論文のコピー(別刷又はin pressの場合は原稿) | 15部 |

書類送付先: 〒105

港区西新橋3-25-8

東京慈恵会医科大学 第1内科

蓮村 哲 宛

Tel: 03-3433-1111 ex. 3210

(奨励賞選考幹事: 沖垣 達、蓮村 哲)

なお、封筒の表に、「日本組織培養学会奨励賞選考書類」と明記願います。

日本組織培養学会奨励賞〔推薦書／自己推薦書〕（どちらか線で消す）

日本組織培養学会会長 殿

下記の若手研究者を日本組織培養学会奨励賞に推薦いたします。

氏 名：

生年月日：

所 属：

住 所：

電 話：

本学会での発表：

年 月 日：

演 題 名：

発表者氏名：（全員記入のこと）

発表論文：（論文名：著者、題名、雑誌名、巻、号、ページ、年）

推薦理由：（別紙の場合はB5版400字詰原稿用紙2枚以内）

平成 年 月 日

推薦者氏名：

所属・現職：

住所：

（自薦の場合は本人の所属、氏名）

*本用紙をコピーしてお使い下さい。

日本組織培養学会奨励賞－選考規定

第1条 名称：日本組織培養学会奨励賞と称する。

第2条 目的：将来性ある有能な若手研究者の研究を奨励し本学会の活性化を図ることを目的とする。

第3条 授賞対象：本学会で発表され（形式不問）、学術雑誌（邦文、欧文双方とも可）に掲載された論文（受理論文可）の第1著者であって、当該会計年度の4月1日現在で40歳未満の会員であること。原則として毎年1～2名に授与される。

第4条 発表期限：過去2年度内に本学会で発表されたものに限る。

第5条 応募方法：論文別刷もしくは受理論文原稿のコピー15部、また内容要旨（400字詰原稿用紙2枚以内）、推薦状（自他薦可）ならびに履歴書各1通を幹事会（奨励賞選考幹事）に提出する。なお応募期限は毎年前年度の12月31日までとする（消印有効）。

第6条 選考：別記細則により幹事会で審査、決定する。

第7条 表彰：本学会の総会時に会長が発表し、賞状ならびに副賞(30万円)を贈る。授賞者が多数の場合は副賞を分割することとする。

第8条 改訂：幹事会を経て総会で行う。

附 則：本選考規定は昭和62年度から実施し、初年度は特例として63年度と併せて表彰する。

細 則：第1条：審議の上無記名投票により授賞者を決定する。

第2条：投票は会長、幹事8名、指名幹事（会計、庶務各1名）2名および当該研究発表時の座長で行う。

第3条：幹事および座長が候補者である場合は投票できないものとする。

S 1992年 World Congress on Cell And Tissue Cultureの参加印象記

藤田保健衛生大学 丸野内 棟

冒頭から弁解で恐縮至極です。小生、今年度の上記学会の Gene Identificationの Session への招待講演を黒田行昭前会長からの推薦によりお引受けしました。ところが私達が新しくクローニングした細胞増殖に関与する遺伝子、Pr22の推定ペプチド鎖に対するモノクロン抗体の調製と、そのウエスタンブロット上での確認に手間取り、米国へ到着後も生来2度目の英語原稿の朗読練習に気を奪われておりました。またスミソニアン博物館や国立美術館に対するお登りさんのあこがれも抑え難くさらには、このような原稿を書く羽目になるとはつゆ想像もしていませんでした。せめてタイトルの参加印象記が参加報告書でなかったことに編集委の温情を感じ、駄文を連ねることをあつかましくも承諾した次第です。

米国組織培養学会は、Vertebrate, Plant, Invertebrate, Toxicology の4部門から構成されておりました。会期は5日間(うち3日間は8時から21時までのハードスケジュール)で、会場はワシントン D. C.のペンタゴンに近いハイアット・レージェンシーホテルでした。全体で口頭発表が300以上、示説が200以上の盛沢山で全貌把握など端から無理でした。印象としては、ロビーでフラフラしている人が意外に少なく、5つの口頭発表会場のうち私の見たところはいずれも適度に混んでいました。

発表の内容の動向についても、今回ちょっと覗いただけではもちろん責任あることは言えませんが、印象に残ったことを以下に述べます。

1. 染色体異常、がん遺伝子やがん抑制遺伝子の発現調節、antiproliferation agents の作用、PGP (mdr) を含む薬剤耐性などを内容とするがん化やがん細胞の性質に関するテーマは割合少なかった。
2. 血球系や中胚葉性幹細胞の分化調節、肝細胞や内皮細胞の分化機能の維持に対するECMの影響などに関する発表が多かった。また、角化細胞の三次元培養中での機能調節などが示説でも多く見られた。
3. 内皮細胞や線維芽細胞を材料とした加齢に関する研究は活発で、SDI-1、IGFBP-3あるいはmortalinなどの遺伝子の同定や導入による研究と、c-fosなどの転写調節因子の変化から説明しようとする研究発表が行われた。
4. Invertebrate では発生機構に関する研究と同時に培養細胞へのvirusの感染と実用化へ向けた大量培養や培地の改良に関する研究発表があった。
5. 植物の組織培養に関する研究は全体の半数近くあったが小生の理解を越えるので全て割愛させていただく。

以上のように本大会をとおして学会の共通テーマは“培養細胞あるいは細胞培養をとおしてのがん研究であり、加齢、発生、分化、機能発現の解析であり、その逆ではないことが重要である”ように感じられた。さて翻って我日本組織培養学会について考えてみると、この数年急速に変貌してきており、組織培養に関する研究討論の場として存続できるかどうか危機的側面もあるように思われる。学界は学問の進展につれて変化するのは当然のことであろうが、組織培養について研究討論を行うという求心力が薄れてい

くと — それが我学会の核であり、多くの先輩が意識的に追求し共有財産として積重ねてきたものだけに — どうなるのであろうか。今後は会員諸兄弟や幹事諸氏の御活躍に期待したい所である。

§ 日本学術会議細胞生物学研究連絡委員会報告

黒田行昭

本学会は日本学術会議の登録学術研究団体となっており、日本学術会議の第4部生物科学の各分野の諸学会と連繋を保ちながら学問の発展に寄与することになっています。現在、細胞生物学研究連絡委員会（細胞生物学研連と略称）は高橋泰常（委員長）、石川春律（群馬大）、大西俊一（京大）、岡田善雄（阪大）、黒田行昭（麻布大）、酒井彦一（東大）、田代裕（関西医大）、永田和宏（京大）、広川信隆（東大）、矢原一郎（都臨床研）、の10名の委員が任命されていて、日本細胞生物学会、日本生物物理学会、日本組織培養学会の3学会がこれに所属しています。これまでに行いました活動状況についてご報告いたします。

1. 第15期日本学術会議会員の選出について

平成3年10月から平成6年9月までの第15期日本学術会議の会員を各学会から推薦するよう依頼があり、本学会では幹事に諮り、山田正篤前会長を推薦いたしました。平成3年5月22日細胞生物学の学術会議会員を選定する推薦人会議があり、この席上で細胞生物学会から推薦のあった高橋泰常氏が会員として推薦され、本学会から推薦しました山田正篤前会長は補欠となりました。これは平成3年7月に決定となりました。

2. 第15期細胞生物学研連の活動について

1) 第1回委員会 平成3年11月13日（水） 日本学術会議

委員長に高橋泰常氏、幹事に永田和宏氏を選出し、平成3年10月23日の日本学術会議第113回総会で決議された第15期活動計画（申合せ）について審議を行いました。第15期活動計画の要点は重点目標として(1)人類の福祉・平和・地球環境の重視、(2)基礎研究の推進、(3)学術研究の国際貢献の重視の3つを掲げ、具体的課題として、15の課題を選定しています。

文部省の科学研究費補助金の「複合領域」に、平成5年度から「基礎生物学」の細目として「細胞生物学」が認められることになりました。平成4年度に開催する第6回細胞生物学シンポジウムは広川信隆委員に世話人をお願いすることになりました。また、第15期生物科学研連の活動方針である「生物学の動行を見極めそれに対応すること」に細胞生物学研連に協力の依頼がありました。そのほか、平成4年度の国際会議派遣候補者として高橋泰常氏を推薦することとなりました。

2) 第2回委員会 平成4年2月28日(金) 日本学会議

第6回細胞生物学シンポジウムは、東大医学部の広川信隆委員のお世話で、平成4年5月16日(土)「神経科学の分子細胞生物学的展開」と題して、東京大学医学部本館大講堂で開催することになりました。内容は第1部神経細胞の情報伝達、第2部神経の分化と形態形成で、7名の方の講演を予定しています。

高橋委員長より、生物科学の動行をとらえ、また、研究体制について討議するため、平成5年度に文部省科学研究費を総合研究(B)を申請する旨報告がありました。また、平成5年度に新設される科研費複合領域の細目「細胞生物学」の審査委員のきめ方について討議され、当面は細胞生物学会から審査委員を推薦し、申請状況を把握しながら、今後の推薦方法を論議することになりました。日本組織培養学会の会員諸氏にもこの細目に数多くの申請がなされ、その実績をふまえて審査委員も本学会から出せるようにしていただきたいと思います。

3) 第3回委員会 平成4年5月16日(木) 東大山上会館

この日は午前10時より前述の第6回細胞生物学シンポジウムが東大医学部で開催され、昼食をかかねて、午前12時より1時間東大山上会館で開かれました。来年の第46回細胞生物学会は平成5年10月20日(水)~22(金)、群馬大学医学部解剖学教室石川春律氏のお世話で前橋市で開催の予定です。また、来年春の第7回細胞生物学シンポジウムは、京都大学胸部疾患研究所の永田和宏氏のお世話で、「細胞骨格と細胞増殖」(仮題)をテーマに開くことが提案されました。

§ 公 募

1. 島津科学技術振興財団による平成4年度研究開発助成応募要綱

(1) 助成の対象

科学技術、主として科学計測およびその周辺の領域における基礎的な研究を対象とする。ただし、助成対象者は原則として45歳以下とする。

(2) 助成の内容

上記研究に対し、助成金を交付する。

援助金総額：2,200万円 1件につき250万円ないし100万円

(3) 応募の方法

当財団所定の研究開発助成申込用紙に必要事項を記入して、当財団に直接申し込む。申込締切は9月30日とする。

(4) 選考審査の方法

当財団に設置する選考委員会が選考し、理事会が審議し決定する。

(5) 交付の方法

平成4年2月(予定)に開く贈呈式において助成金を交付する。

(6) 連絡先：財団法人 島津科学技術振興財団

〒604 京都市中京区西ノ京下合町11番地

電話 (075) 823-3240

2. 平成4年度 功労者表彰の候補者推薦について(依頼)

拝啓 時下益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

毎々格別のご援助を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、当財団では平成4年度も昨年度と同様に、功労者表彰(島津賞)を計画いたしましたので、該当者がございましたら下記要綱に従って、ご推薦くださるようお願い申し上げます。

貴会の一層のご発展をお祈り申し上げます。

敬 具

記

(1) 表彰の対象

科学技術、主として科学計測およびその周辺の領域における基礎的な研究において、近年著しい成果をあげた功労者。

(2) 表彰の内容

上記功労者に対し、賞状、賞牌、副賞賞金300万円を贈呈する。

(3) 表彰件数

最大2件

(4) 推薦の方法

当財団所定の推薦書による。貴会よりの推薦は1件1名とし、連名は除く。

申込締切 9月末

(5) 選考審査の方法

当財団に設置する選考委員会が選考し、理事会が審議し決定する。

(6) 交付の方法

平成5年2月(予定)に開く表彰式において表彰する。

(7) 受賞者による講演

受賞者には上記受賞後、当該研究について講演をお願いする。

§ 関連学会及びセミナーの開催

1. バイオジャパン '92シンポジウム

主 催 (助)バイオインダストリー協会
共 催 (助)ヒューマンサイエンス振興財団
(社)農林水産先端技術産業振興センター

日 時 8月26日(水)～8月28日(金)
場 所 横浜国際平和会議場(パシフィコ横浜)

2. 第1回日本バイオイメージング学会学術集会

日 時 1992年10月16日(金)
会 場 国際研究交流会館 国際会議場
東京都中央区築地5-1-1 国立がんセンター内
電話 03-3543-0332

主 題 医学・生物学の分野では、分子レベルでの研究に加え、データの視覚化、画像化による解析がますます必要とされて来ています。

本学術集会(画像解析シンポジウム)では、

- (1) 生体の動きのリアルタイムでの視覚化
- (2) 細胞内分子の動的変化、代謝・エネルギー変換の視覚化
- (3) 生体分子の物理化学的性質の解析画像
- (4) 分子のモデリング、ドラッグデザイン

に関する特別講演と一般講演とを行ないます。一般講演を広く募集いたしますので、ふるってご応募下さい。

講演申込締め切り：1992年7月31日(金)消印有効

講演要旨締め切り：1992年9月10日(木)

参加費(含む要旨集代)：一般 4,000円 学生：2,000円 懇親会費：1,000円
(当日支払)

なお、当日会場にて日本バイオイメージング学会の入会受付を致します。

申込および問い合わせ先：〒467 名古屋市瑞穂区川辺通3-1

名古屋市立大学薬学部

中西 守

電話：052-836-3411

F a x：052-836-3414

3. 第42回科学講演会開催計画

主催 財団法人 東レ科学振興会
千葉県浦安市美浜一丁目8番1号(東レビル)
TEL(0473)50-6104 FAX(0473)50-6082

後援 朝日新聞社

とき 平成4年10月26日(月)
開場:17時30分
開演:18時00分 終演:20時45分

ところ 有楽町朝日ホール
東京都千代田区有楽町2-5-1
有楽町マリオン11階 (JR線有楽町駅前)

テーマ “自然科学の原点、博物学について考える”
～ナチュラル・ヒストリーのすすめ～

I. 博物学的発想とはなにか

京都大学理学部教授 日高敏隆

II. 博物学としての生化学

北海道大学名誉教授 茅野春雄

その他

★入場料、定員638名(予約なし・先着順)

★ご来聴の方には、後日講演記録集を進呈します

編集後記

○第65回大会は、及川胤昭世話人並びに関係者の御尽力により、さくらんぼの里“山形市”の「遊学館」で充実した内容で、かつ盛会裡に終了しました。山形新幹線“つばさ”が開通する丁度1ヶ月前で“つばさ”の初乗りは叶いませんでしたが、却ってその方がよかったとの声もしきりです。

○幹事改選の年に当たり、新幹事による最初の会員通信です。今回は会員の皆様方から多数の記事を頂き、ボリュームのある会員通信が発行できることをとても嬉しく思っております。唯、不慣れなために原稿の組み方など読みづらい点多々あるかと心配しております。今後とも会員皆様方の御協力、御助言、御鞭撻を宜しくお願い致します。

(Y. U.)

平成3年11月から平成4年4月末まで
(5月22日現在)

§ 新入会員

氏名	現住所	所属機関・所在地
小坂 忠之	〒329-42 足利市多田木町 539-2 スカイ ハイツ203 ☎0284-91-3650	栃木県繊維工業試験場 *〒326 足利市西宮町 2870 ☎0284-21-2138
内藤 瑋一	*〒305 つくば市竹園 3-503-102 ☎0298-51-2723	筑波大学臨床医学系皮膚科 〒305 つくば市天王台1-1-1 ☎0298-53-3128
児玉 道	〒061-01 札幌市豊平区羊ヶ丘 5K-11 ☎011-851-5226	農水省家畜衛生試験場北海道支場 *〒061-01 札幌市豊平区羊ヶ丘 4 ☎011-851-5226
津雲 勝義	〒250 小田原市中里 33-3 エスポアール YAZAWA 305 ☎0465-42-5527	鐘紡(株)化粧品研究所製品科学研究所第二グ ループ *〒250 小田原市寿町 5-3-28 ☎0465-34-8568
新妻 勲夫	〒177 練馬区上石神井 2-33-15 ☎03-3928-0150	新妻犬猫病院 *〒177 練馬区上石神井 2-33-15 ☎03-3928-0150
合田 栄一	〒703 岡山市今在家 304-6-406 ☎0862-75-3653	岡山大学薬学部生物薬品製造学教室 *〒700 岡山市津島中 1-1-1 ☎0862-52-1111
三上 かおり	〒179 練馬区春日町 1-36-14 ☎03-3577-0345	帝京大学薬学部生理化学教室 *〒199-01 神奈川県津久井郡相模湖町寸沢嵐 1091-1 ☎0426-85-1121
小林 昶運	〒544 大阪市生野区田島 5-18-17 ☎06-754-9420	新田ゼラチン(株)中央研究所 *〒581 八尾市二俣 2-22 ☎0729-49-5381
三羽 信比古	〒727 庄原市七塚町 562 ☎08247-4-1000	広島県立大学生物資源学部 *〒727 庄原市七塚町 562 ☎08247-4-1000
刈屋 美枝子	*〒167 杉並区下井草 1-23-2-305 ☎03-5382-2884	早稲田大学教育学部生物学教室 〒169-50 新宿区西早稲田 1-6-1 ☎03-3203-4141
栗田 武	〒356 川越市藤間 404-5 ☎0492-44-4410	早稲田大学教育学部生物学教室 *〒169-50 新宿区西早稲田 1-6-1 ☎03-3203-4141

氏名	現住所	所属機関・所在地
並木秀男	〒165 中野区大和町 2-8-7 ☎03-3337-5066	早稲田大学教育学部生物学教室 *〒169-50新宿区西早稲田 1-6-1 ☎03-3203-4141
瀬川博嗣	〒665 宝塚市長寿が丘 17-46 ☎0797-84-6044	タカラベルモント㈱化粧品研究開発室 *〒542 大阪市中央区日本橋 2-7-9 ☎06-641-5673

〔賛助会員〕

機関名	所在地
国際試薬㈱バイオ事業部 福田章	*〒651 神戸市中央区浜辺通 2-1-30 ☎078-231-4151

§ 住所変更

氏名	現住所	所属機関・所在地
神野哲夫	〒470-11豊明市栄町南館 3-740 ☎0562-622-761	藤田保健衛生大学附属病院脳神経外科 *〒470-11豊明市杏掛町田楽ヶ窪 1-98 ☎0562-93-2385
桧垣昇三		帝京大学医学部整形外科 *〒173 板橋区加賀 2-11-1 ☎03-3964-1211
光山冬樹	〒458 名古屋市緑区鳴海町字姥子山22-1 鳴海団地 101 ☎052-622-9231	藤田保健衛生大学附属病院脳外科 *〒470-11豊明市杏掛町田楽ヶ窪 1-98 ☎0562-93-2385
斎藤俊行		放射線医学総合研究所 *〒260 千葉市穴川 4-9-1 ☎0472-51-2111
遠藤元繁	*〒412 御殿場市新橋 1849 ☎0550-82-8855	
谷 莊吉	*〒211 川崎市中原区木月 464	(医) 社団至恩会上尾避生病院ホスピス棟 〒362 上尾市地頭方 421-1 ☎048-781-1101
蔵永伊織	*〒572 寝屋川市葛原新町 13-1-309	住友製薬(株)研究所 〒554 大阪市此花区春日出中 3-1-98
宮本庸平	*〒525 草津市矢橋町 550-33	東レ(株)基礎研究所安全性研究室 〒520 大津市園山 3-1-2
佐藤 威	〒305 つくば市下広岡 419-18 ☎0298-57-5892	農林水産省蚕糸・昆虫農業技術研究所 *〒305 つくば市大わし 1-2 ☎0298-38-6156
山岡成章	*〒655 神戸市垂水区学が丘 4-21-3 ☎078-785-7411	山岡小児科医院 〒655 神戸市垂水区学が丘 4-21-3 ☎078-785-5306
森本道雄	*〒573 枚方市三矢町 3-17 森本玲子様方 ☎0720-41-2162	京都府立医科大学第三内科学教室 〒602 京都市上京区河原町通広小路上ル 梶井町 465 ☎075-251-5519
井上幸重	*〒615 京都市西京区桂坤町 30-4 ☎075-391-7398	京都大学ウィルス研究所 予防治療部 〒606 京都市左京区聖護院川原町 ☎075-751-4025
関口守正	*〒184 小金井市東町 3-6-39 ☎0422-31-2655	東京大学医科学研究所 癌病態学研究部 〒108 港区白金台 4-6-1 ☎03-3443-8111

氏名	現住所	所属機関・所在地
岩田 邦男		日本たばこ産業(株)医薬研究所 *〒227 横浜市緑区梅ヶ丘 6-2 ☎045-972-7001 内線 641
岡本 純英	〒852 長崎市竹の久保町 15-12 ☎0958-62-6979	岡本ウーマンズクリニック *〒850 長崎市江戸町 6-5 江戸町センタービル 5F ☎0658-20-2864
白川 弘泰	〒526 長浜市平方町 1214-5 メゾン・ド・シャンドール W202 ☎0749-65-1510	白川眼科クリニック *〒526 長浜市宮司町 1105-3 ☎0749-64-1007
渡辺 吉雄	〒251 藤沢市藤が岡 2-22-3 ☎0466-27-7103	メルシャン(株)中央研究所 *〒251 藤沢市城南 4-9-1 ☎0466-35-1517
片桐 稔		オリエンタル酵母工業(株)バイオ関連事業部 *〒103 中央区日本橋小伝馬町 10-11 日本橋府川ビル ☎03-3663-8218
安部 康治		大分医科大学第三内科 *〒879-55大分県大分郡挾間町医大ヶ丘 1-1-1 ☎0975-49-4411
北澤 利記	〒678-02赤穂市加里屋 102-6	大塚製薬(株)眼科用外用製品事業部赤穂研究所 *〒678-02 赤穂市西浜北町 1122-73 ☎07914-3-4333
氏家 邦夫	〒146 大田区仲池上 2-10-16 森永池上寮 ☎03-3760-9088	森永乳業(株)生物科学研究所 *〒228 座間市東原 5-1-83 ☎0462-52-3060
色田 幹雄		放射線医学総合研究所 薬学研究部 *〒263 千葉市稲毛区穴川 4-9-1 ☎043-251-2111
橋爪 壮	〒263 千葉市稲毛区長沼町 288-91 ☎043-251-1201	(株)日本ポリオ研究所 *〒189 東村山市久米川町 5-34-4 ☎0423-93-3191
佐藤 弘毅		放射線医学総合研究所 遺伝研究部 *〒263 千葉市稲毛区穴川 4-9-1 ☎043-251-2111
米村 勇	〒261 千葉市美浜区稲毛海岸 5-5-4-205	東京医科歯科大学医学部法医学教室 *〒113 文京区湯島 1-5-45
永井 栄一	〒262 千葉市花見川区花園 1-5-6 原田荘 8号 ☎043-272-1850	第一製薬(株)医薬開発第3部 *〒134 江戸川区北葛西 1-16-13

氏名	現住所	所属機関・所在地
井 篤 千263	千葉県稲毛区小中台町 830-1-304 ☎043-253-3915	放射線医学総合研究所 障害基礎研究部第一研究室 *千263 千葉県稲毛区穴川4-9-1 ☎043-251-2111
木 健 志 *千261	千葉県美浜区稲毛海岸 5-5-10-303	水産庁海洋漁業部 国際課 千100 千代田区霞ヶ関 1-2-1 ☎03-3502-8111
藤 俊 行		放射線医学総合研究所 *千263 千葉県稲毛区穴川 4-9-1 ☎043-251-2111
島 聡 千263	千葉県稲毛区天台 1-9-3-102 ☎043-253-5052	東京大学薬学部 *千113 文京区本郷 7-3-1 ☎03-3812-2111
井 敏 雄 千260	千葉県中央区松波 1-8-3 ☎043-251-9640	極東製薬工業(株)研究開発部 *千318 高萩市大字上手綱字朝山 3333-26 ☎0293-23-0911
橋 望 彦 *千174	板橋区常盤台 2-33-16-508 ☎03-3969-0700	肺癌研究会附属病院中央検査部
山 政 明 千812	福岡市東区松島 2-5-18-2 ウメズハイツ303 ☎092-611-6478	石原内科循環器科病院 *千812 福岡市博多区古門戸町 1-2 ☎092-271-5858
馬 雅 行 *千310	水戸市笠原町 1018-2 堀江マンション206 ☎0292-44-5446	(財)茨城県総合健診協会 検査部二課 千310 水戸市笠原町字上組 489-5 ☎0292-41-0011
田 行 昭 千411	三島市初音台 24-8 ☎0559-71-7224	麻布大学環境保健学部遺伝子・細胞生物学研究室 *千229 相模原市淵野辺 1-17-71 ☎0427-54-7111
瀬 清		昭和大学薬学部微生物薬品化学教室 *千142 品川区旗の台 1-5-8 ☎03-3784-8208
藤 宗 平 千222	横浜市港北区太尾町 991 ポーラアパートA-106 ☎045-542-1574	ポーラ化成工業(株)横浜研究所研究技術情報部 *千221 横浜市神奈川区高島台 27-1 ☎045-322-7111
瀬 一 郎 *千880	宮崎市権現町 55-1	九州大学医学部 第一内科組織培養研究室 千812 福岡市東区馬出 3-1-1 ☎092-641-1151

氏 名 現 住 所

所属機関・所在地

〔賛助会員〕

機 関 名

ホーユー㈱研究所
杉浦秀次

*〒480-11 愛知県愛知郡長久手町大字長湫
木 1-12 ☎0561-62-0511

§ 退 会 (8名、2社)

松本堅太郎 (東京大学医学部 歯科口腔外科)
中村士郎 (日本大学医学部 第二外科)
古旗 茂 (慶應義塾大学医学部 脳神経外科)
二階堂 修 (金沢大学薬学部 放射薬品化学教室)
原田喜男 (塩野義製薬㈱研究所)
沖 俊一 (ブリストル・マイヤーズ研究所㈱)
佐々木 弘 (九州大学医学部 放射線基礎医学教室)
山崎正志 (千葉大学医学部 整形外科学教室)

久保田商事㈱ (賛助)

ユー・エイチ・アイシステムズ㈱ 上甲龍也 (賛助)